

〈総合B〉

## 「人権・生命・環境」を担当して

佐々木一也・上田 恵介・金子 啓一

### 三題話のオチ

われわれの総合Bは、哲学の佐々木一也が「生命」、生物学の上田恵介が「環境」、現代神学の金子が「人権」をもっぱら担当し、佐々木がコーディネーターを務めるという「絶妙な!?!」「役割分担」で授業展開がなされた。丁々発止の受け答えや真摯な（というか、闘志満々のというか）論議で、教員相互の学的刺激も多大であり、かつ大いに愉快でもあった（ように思われる）。そうした点を踏まえると、われわれの総合Bの紹介をという全カリ研究・開発委員会からのお求めに、臨場感を少しでも含めながら応えるためには、一人の視点で封じ込めることは避けたほうが好ましく思われ、「独断と偏見」の色合いを滲み出させていたとしても、三者三様で書き記すことが肝要だと判断し、そうさせて頂くこととした。調整は一切していない。

### もうかりまっか

かつて一般教育部があった頃、3分野（自然・人文・社会）共通の総合科目に「東西思想の対話」があった。哲

学の横山先生がコーディネーターで、これに私や佐々木一也先生（哲学）、月本先生（キリスト教）、佐々木研一先生（化学）、三浦先生（哲学）、間々田先生（社会学）、英語の阿部先生、佐竹先生や、フランス語の宇野先生など、年によってメンバーは入れ替わっても、また自然、人間、死など、テーマもその都度変わってきたが、基本的に担当教員の全員が、自分が講義を行わない時でも、学生と共に教室に座って、時には講義の最中に鋭い質問を投げかけて、議論をもり立てるというスタイルでやってきた。このスタイルが今の総合Bの原型である。

さて、一般教育部は解体したが、全カリになっても総合Bの「人権・生命・環境」を担当することになった。私は生態学と言う学問をやっているおかげで、理系と文系の境界領域的な所で異分野間のつなぎ役に便利だと思われたのか、ほとんど毎年関わることになってしまっている。

かつての「東西思想の対話」そして今の総合Bの「人権・生命・環境」、どの講義もそれなりに成功してきたと思う。成功というのは教員の自己満足

ではなく、講義を受けた学生たちが、講義を苦痛でなく、面白く、楽しく受けることが出来て、知的刺激や教員一人一人の思想に啓発されて、結果的に「儲かった!」と思うような講義が出来たということである。

大学の“先生”は、ともすれば自分が“エライ”と思っている（今、この文を読んでるあなたですよ!）。だがそれなりに“エライ”のは、その人の専門分野だけのことである。私は生態学のことなら少しは話せるが、フーコーもソシュールもハイデガーもわからない。それどころか、行列も偏微分も使えないし、DNAの分子構造さえうる覚えである。『アルジャーノンに花束を』（ダニエル・キイス著）の主人公のチャーリーに議論をふっかけられて答えに窮してしまう大学の教授ではないが、「大学の先生のくせに、ギリシャ語もヒンズー語も読めないんですか?」と言われると、「はい、すみません」と言って引き下がらざるを得ない。とはいえ、生態学にはギリシャ語もヒンズー語も、まあとりあえず必要はない、と思っておくことにする。

だから総合Bで3人で講義していると、一人一人は学生相手に、自分の守備範囲を、それなりに“やさしく”講義しているつもりでも、他の2人にはこれがなかなか新鮮なのである。金子先生の水俣や横浜の寿町の話。佐々木先生の物事の本質にせまる厳密な哲学的分析。また学生にも常に意見を求めるから、若い世代の価値観にも触れる

ことができる。

その中で、大学で教える立場に立っている自分が、人に誇りうるどのような思想をもっているのか。大学を離れて家族の中や地域社会で生きている自分が、人間としてどのように尊敬される生き方をしているのか。総合Bの講義をしながら、学生の討論や同僚たちの講義を聞きながら、こうしたことを考えることが多くなった。そう、一人がしゃべっているときはあとの2人は学生なのだ。このことに気がついたとき、総合Bの教室に向かう自分の足どりが軽い理由が自分なりに納得できた。

こうしたことが一人で講義していたのではなかなか見えてこないように思う。独りよがりの“王国”を教室に築いて、一人満足している教員だって多いのではないか? 総合Bは教員にとっては、自分が教員として大学の教壇に立つことの原点を見直すことができるいい機会だと思っている。

総合Bには財政事情の厳しい我が大学にしては珍しく、非常勤コマが3つもつけられている。つまり“金がかかっている”のである。そのかけた金に見合う講義、学生たちが「儲かった!」と思うような講義がぼろぼろ出てくること、それが全カリ総合Bに課せられた課題であると思うのだが、どうだろうか。

(うえだ けいすけ 本学理学部助教授)

## 他部局との連繫による授業の創出

私はこの授業のコーディネーターとして参加した。コーディネーターとしての役割は多々あるが、授業開始以前の準備段階から仕事がある。この授業では学生部セミナー「環境と生命」及び人権問題委員会主催「人権週間」の催しと連携させていただいたため、その調整を初めにしなければならなかった。

学生部に関しては、金子先生の間関係をたよりに我々の授業の趣旨を説明しに行ったり、学生部セミナーを運営する部局の方々と合同の会議などを行い、双方の考え方をすり合わせる作業を行った。学生部の方々は我々の趣旨をご理解下さり、セミナーを授業と連携して運営することを快く承諾して下さいました。その結果、学生部セミナーのテーマは学生部が独自に発想し決定したのだが、その運営に関しては我々の授業を考慮して前後期の日程などを調整していただけた。学生部の企画の趣旨、環境と生命に関する学生部の考え方、学生部セミナーの中での今年度の位置づけなどの説明も得られ、授業運営にも大いに刺激になり、我々授業担当者にとっても大変有益であった。

人権委員会に関しては、まず授業実施年度とその前年度とでは委員会の構成が異なり、実施年度の後期分を含めて前年度中に人権週間企画を決定していただかなくてはならないという問題が生じた。また、学生部の場合はこの

授業の構想の段階から好意的であったのに対して、人権委員会には授業と連携することに慎重な委員が少なくなかった。従って、私が直接人権委員会に出席して、授業の趣旨を説明し、人権委員会との連携の必要性を力説し、その上で翌年度の後期まで企画を決定するという、それまでの人権委員会の仕事を変更することをお願いしなければならなかった。私にこのような機会を持つことが出来たのは、当時の人権委員会委員長であられた正田先生の御好意によるものであった。さらに先生が我々の授業の趣旨に対して好意的に委員会をおまとめ下さったおかげで、人権委員会は我々の授業の連携と翌年度の後期までの企画策定とを決定して下さいました。この場を借りて、正田先生には改めて御礼申し上げたい。

こうして、正課外行事を授業に取り組み試みは関係者の理解を得て、実現に大きく一歩を踏み出したのだった。しかし、ここで最後の関門として登場したのが、他ならぬ当の全カリ運営センターだった。周知の通り、総合B科目にはそれを奨励する意味からも非常勤講師コマが3コマつくことになっているが、この授業に関して全カリ幹部からクレームが付いたのである。

我々の授業は学生に各学期2回ずつ学生部セミナーまたは人権週間の催し物に出席しレポートを提出することを義務づけている。学生をそれだけ拘束するので、その分3人で担当する授業機会を減らしている。授業には3人が

常時参加し、講義をしたり討論をしたりすることになっている。しかしそれに対して、減らした分だけ教員が楽をしているので非常勤コマはつけられない、というクレームが付いたのだった。

新しい試みに対しては常に風当たりがある。授業担当とは、実地に一定時間授業を運営することだというのが従来の常識であったのだから、このクレームは当然でもあったのだ。私はたびたび企画書を書いて、我々の試みが授業の形態を変えるだけではなく、授業のコストの考え方をも変えることを訴えなければならなかった。学生は正課外の催しに2回出るだけでよいのだが、我々授業担当者は全部の催しに出席し、場合によっては講演会の司会をし、討論会の司会もする。各学期5回から6回の催しがあり、その度ごとにレポートが出てくるので、即座に3人全員がそれを読む。そして、学生の意見と講演会映画会などの内容を踏まえて次の講義の内容を準備する。確かに3人の担当する授業時間数は通常よりやや少ないが、正規の時間外で学生に接している時間、多くのレポートを評価している時間も授業として数えて欲しいというのが我々の要望である。これは他の授業についても言えることだが、授業にかかるコスト計算があまりに一律形式的に過ぎるのではないだろうか。この授業によって我々は、大学における授業の従来の概念に再考を求め一石を投じたつもりである。

結局、全カリ当局は我々の企画書の

趣旨を理解し、この授業は担当者にとって新たな負担の純増を伴わない形で実施することが出来た。このような各部局との対話、すり合わせが、この授業を生かしたのだと思われる。我々は総合Bを質、量ともに充実させてゆくことこそが全カリ総合科目の理念の現実化につながると考えている。少なくとも私は全カリ総合科目は専門科目に対する対抗科目だと考えている。理論的整合性を重んじる専門科目が大学の教育研究の中心を占め、大学を代表するとすれば、全カリ総合科目はそれを陰で支え、常にリフレッシュできるように刺激し続ける役割を担う。学問が普遍的であるためには常に現実の多様な領域との交流が不可欠である。全カリは学生と共に冒険的にそのような交流を試みる場なのである。その意味で、我々の試みが大学の多様な要素との対話を生み出すならば、その目的の半分は達成したと言えるのではないだろうか。

(ささき かずや 本学文学部助教授、1997年度総合Bコーディネーター)

## ガイアの響きをどこで聞くか

「人権・生命・環境」——というと、ほかの総合Bのテーマと比べても、どうも納まりが悪い。三者がうまく繋がっていかない。そうした反応を示す学生や教員は少なくなかった。言われてみると、そのような感じがしないわけではなかった。しかし、じっと眺めて

いると、私には、この総合B発案者の一人のせいかな、三題話めいたテーマだが、なかなか味があり意味深いのではないかと思われるのだ。繰り返しになるが、確かに「人権」と「環境」は、なかなかうまく結びつかないようにみえる。だが、それら両者を、「生命」が仲立ちをして繋いでいる。その担当がコーディネーターの佐々木先生だということも、うまくできていた。

といっても困難さはあった。そのひとつは、われわれの総合B企画が、学生部主催のセミナー「環境と生命」、および人権問題委員会主催の人権セミナーを組み込んでの展開だったことだ。そのため、授業の振れ幅が広がり多角的な知・学の提示が可能になるという意義があった。しかし、長所は短所に転化しやすい。学生部や人権問題委員会の、大きく強いご協力があったにもかかわらず、それらの企画の細部が決定する時期が、われわれの総合Bのシラバスなどの決定・提示の締め切り時とせめぎ合いにならざるをえず、またセミナーの中味が、こちらの総合Bのテーマと繋ぐ際に、ある種「強引さ」も介入し戸惑うことも少なくなかった。例えば、前期では、学生部セミナーから、非ヒト生命やガイア（地球を大きな生命体とみなす仮説）というキーコンセプトを抽出できるとすれば、人権問題委員会の方からは、プライバシーというコンセプトが提示されたといえる。後期について言えば、前者からは、ガイアと有機農業が、後者からは、子

どもの権利条約が目立っていた。では、ガイアと人間のプライバシーとどのような関係があるのか、関係づけるのか。ガイアと子どもの権利とどのような関わりを見いだそうというのか。強引なこじつけになりはしないか、と懸念もされた。結果的には、杞憂に終わったと思われるが。

困難さのもうひとつの理由は、今回の例でいえば、ガイア仮説をめぐる、セミナー講師の方全員が展開していったわけではなく、またスタッフ間でも意見が両端に分れたにもかかわらず、授業時も非番の日も、十分な議論がなされたとは必ずしも言えなかったことだ。また、時間帯が1・2限であったため、議論がせつかく盛り上がりながらも、次の講義の講師がすでに控えておられては、さらに次の授業に向かうために気がせく学生もいて、時間切れで、時間配分を失敗した教員側の責任はあるにしても、気がそがれたことも少なくなかったことを思い起こす。（ついでに言えば、こうした授業は多少の延長可能な時間帯—3・4限や9・10限で、さらに教室も机や椅子の稼働可能なところなどの工夫が必要なものに思う。）

これでは、内容的な具体性に欠けるかもしれないので、以下少し説明を加えてまとめおきたい。後期の授業で、人権問題委員会セミナーの「子どもの権利」を少しズラして、子どもの視点の重要さを、私は、私の話の切り口にした。ここですでに、子どもを大人に

なるまでの未熟な発展と捉える他のスタッフと食い違いが生じた。「星の王子さま」の指摘を待つまでもなく、子どもの創造的固有性は認めざるをえず、単に教育されなければならない存在などではないはずだ。子どもの残酷さはよく言われる点だが、これもむしろ大人や大人社会、その価値観に歪められてとは考えられないか。相手は、動物と人間の類比で、子どもと大人を眺めているのではないか。子どもを美化するつもりはないが、そう私には思えた。学生の賛否の意見をインタビューもしたが——その多くは嬉しくも私への反論であった。私の発想では、そうした子どものもつ固有性、つまり小ささのなかに秘められる力、とくに幼児に顕著なように無力さでありながらそれが強さを持つという逆説は、ガイアと結びつくように思われるのだ。ガイア（という仮説が成り立つとして）の力は、そうした小さなものところによく現れる。生命が疲弊した時に生命の源・底が示されてくることを体現された水俣病の「患者さん」たちの証言は、その類例ではないか。ドイツの美術史家アビ・ワールブルクの言葉を借りれば「神は細部に宿る」はずだからだ。だから、子どもの「権利」を主張する、その根っこに、「子ども」との呼吸でガイアの力を感じることが含まれていなければならない、と思われた。その意味で、無力さという力の大切さを

述べた。これに対しても、学生に「無力さ」など説かないでくれ、という声も聞かれ、とても興味深い反論であった。しかし、残念なことに、以上で述べてきた事柄全てに関し、上で述べたように時間の制限などもあって、教員間、学生間、教員学生間、いずれの場合も、話し合いが消化不良に終わったように思われる。出たとこ勝負の場面があっても、それを裏打ちする打ち合わせがもっと行われていけばという反省が残る。スタッフが皆忙し過ぎ、十分な時間を取れなかった。今後の課題であろう。ともあれ、「教育」の効果は、速攻とは限らない。不十分ながらも、垣間見ることのできたはずの、教員間、学生教員間などでの白熱した議論の中から、何かを受講生のなかに刻み込まれ、いつか芽を出す、そんな希望をもってはいる。そんなことも含め、当然ながら困難さ・課題はあったが、総体として、他のスタッフの講義の名調子も学ぶことができ、とても楽しくやれた（と思っている）。また、学生部の方の参加もあり、この点も十分な話し合いができたとは言えないが、こうした協力も刺激になり感謝している。また、いつかこのメンツで総合Bを持てればと願っていることをお伝えし、この稿の責を終えたい。

(かねこ けいいち 本学文学部教授)